

# 近自然学：Kinshizen

## 混迷の時代を豊かに生き延びるための『近自然学』

### 混迷の原因は時代が大きく変わり、我々の価値観が変わったこと

- ・今、混迷の時代と言われ、全世界の環境、経済、政治、文化、教育、人間関係、日常生活など社会のあらゆる分野で全てが上手く行かなくなった
- ・その原因は時代が大きく変わったこと
- ・時代が変わるとは、人々の『価値観・人生観・意識・理想像・求める物』などが変ること
- ・価値観の転換の代表が、『量から質へ』、『集中から分散へ』の2点
- ・時代が変わると古い時代のパラダイムは通用しない（パラダイムとは考え方の規範・基準）
- ・硬直化した古い考え方、古い手法、古いシステム、古い人材ではこの危機を乗り越えることができない
- ・新たな考え方・システム・人材が求められる（逆に、新しければ何でも良いわけではない）
- ・新しい時代にふさわしいパラダイムとそれに基づいた実践手法が危急の課題
- ・『近自然学』は新しいパラダイムであり、新しい考え方、システム、人材などを提案する

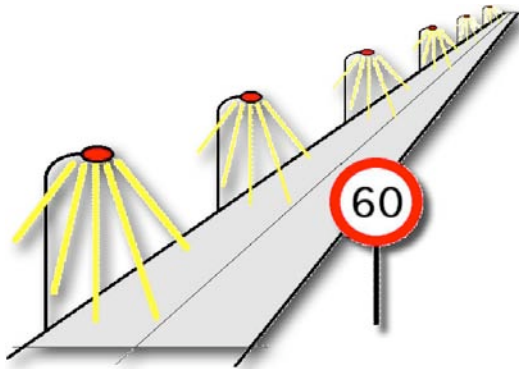
## 『近自然学』の原則

- 1) 発想転換を！：ハシゴ段のつぎ足しはダメ
- 2) システム思考（脱パーツ思考）：広い視野で全体を見る、部分しか見ないのはダメ
- 3) 両立・共存・共栄を図る：対立・競争・二者択一では皆が満足できる解決策はない
- 4) 再生エネルギーと再生資源で豊かさを！：脱石油、脱核
- 5) 負荷は集中、対策は分散：負荷の分散、対策の集中はダメ
- 6) 環境貢献プレミアム（報償）& 環境負荷ペナルティー（罰則）
- 7) 『手段』と『目的（目標）』を混同しない：バックキャスト手法を
- 8) ランドシャフト（気持ち良いかどうか）を環境評価の一基準に！
  - ・ランドシャフトとは景観・景域・景相・風景・風土・風光・光景・情景・心象風景などと訳されるドイツ語
  - ・五感（視・聴・嗅・味・触覚）とそれらによる心の動き（感動・好悪など）、つまり我々の認識のこと
  - ・良いランドシャフトは『気持ち良い：快い、心地よい、旨い、楽しい、香しい、ワクワクするなど』
  - ・気持ち良い（快い）と『生き延びやすい』：生き延びやすい状況を我々は気持ち良いと感じる
  - ・それは我々（動物も）の五感は危険を察知するセンサーとして発達したから
  - ・我々には危険の少ない状況を快く感じ、反対に危険の多い状況を不快に感じる本能がある
  - ・危険センサーである五感に違和感のないのが気持ち良い状態
  - ・『気持ち良い』のは直感的・本能的に安全、健康、食べ物が豊富、子孫が繁栄しやすいと察知してること
  - ・そこで、『気持ち良い（快い）かどうか』を基準に、我々の身の回り（環境）を評価したい
  - ・気持ち良い（快い）環境は生き延びやすいだけでなく、住みやすく心豊かな人生を約束してくれるので多くの人が賛同するはず
  - ・これなら誰でも評価に参加できるので、それだけ環境を監視する目が広がり、異変を発見しやすくなる

# 『近自然学』の応用

## 1) 新しい道づくり

- 安全、低エミッション、スムーズな流れ、そして気持ち良く走りやすい道路設計法



広くて真っ直ぐで見通しが良く夜は明るい従来の道づくり

大事故・排ガスを減らし多くのクルマを流せる新しい道づくり

## 2) 新しい川づくり

- 水害に対する安全性と同時に、自然環境、ランドシャフト、親水性、自浄力なども同時に改善する
- その川の自然なダイナミクス(元気さ)をうまく利用するため、失敗がなくコストや環境負荷が少ない



左：水害が頻発した再改修前のドイツ・バイエルン州ロイサッハ川

右：1994年に近自然工法で再改修を受けて11年目

## 3) 新しいエネルギー & 資源利用

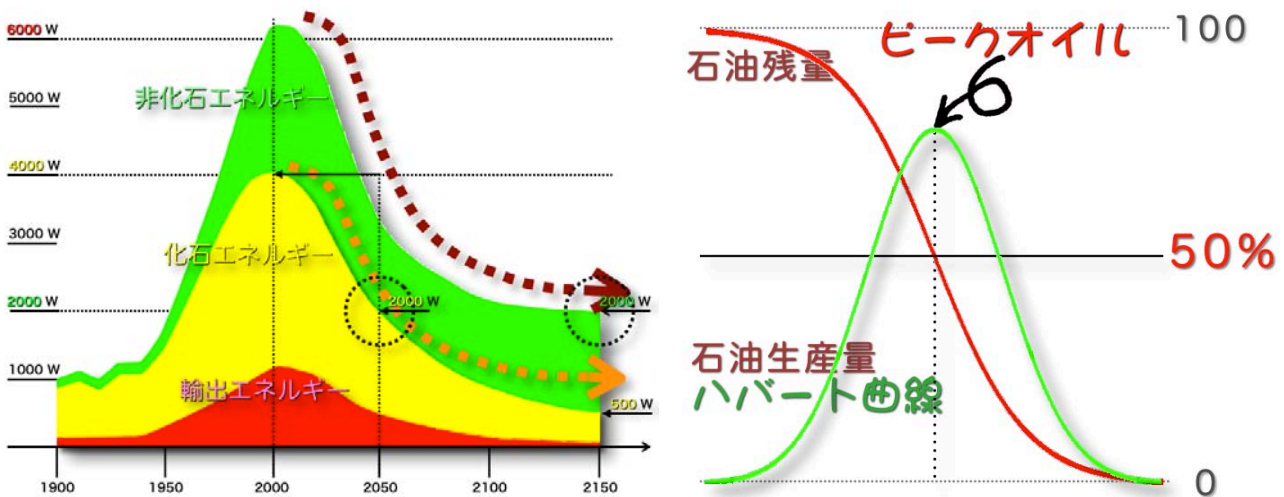
- 再生エネルギー(主に太陽エネルギー)の有効利用とその割合を増やすことを考える (脱石油)
- 太陽エネルギーは広く薄く分散しているので、石油エネルギーのように一カ所だけに集中して利用するのは上手いやり方ではない
- 高価なハイテクをほんの少しより、廉価なローテクをできるだけ広く使うのが良い
- 太陽エネルギーの有効利用で忘れてならないのは、農林水産業の体質改善 (脱石油化)



太陽エネルギーには色々な形があるが、その中でバイオマス(生物資源)と水のみが形のある資源だ

#### 4) スイスは『2000W社会』を目指す

- 『2000W社会』とは、チューリッヒ工科大学が開発したエネルギー・モデル
- 豊かさ（利便性、快適性、安全性、健康、収入、個人的発展など）を落とさずに持続できる
- スイス国内で消費するエネルギーを頭割りした値が2000W（常に1人2000W使うという意味）
- 年間1人当たり、17.5 kWh に相当
- 2000Wの3/4が再生エネルギー、1/4が化石エネルギー
- そうすると、CO<sub>2</sub> 排出量は年間1人当たり約1トン（約1/6）にまで落とせる
- 2000Wに核エネルギーは含まない：脱核エネルギー



- 石油の問題は枯渇ではなく『ピークオイル』だ

いつまでも石油に依存しては人類の明るい未来はない。日本ではまだ認知されていないが、ヨーロッパでは広く浸透している概念に『ピークオイル』がある。石油は有限の資源エネルギーであり枯渇が心配される。しかし石油は枯渇しない。残量が少なくなると価格が上がり、消費量が抑えられるからだ。だから問題は枯渇ではなく、価格の高騰だ。1956年、シェル社の地質学者、M.キング・ハバート博士が石油の埋蔵量と生産量との関係を解析し、ベル型のハバート曲線を生み出した。油井の残量が50%の時に生産量は最大となり、その後は減少する。地球を大きな油井と見なせば、同様に残量が半分の時に生産量はピークを迎え、その後は次第に減る。そしてそれは石油価格の高騰を招く。そんな『ピークオイル』は一体いつなのか？ 実は2005年にすでにピークを迎えたいのだ。

#### 5) 新しい社会システムへの提案：タレント・プール・システム（人材バンク）

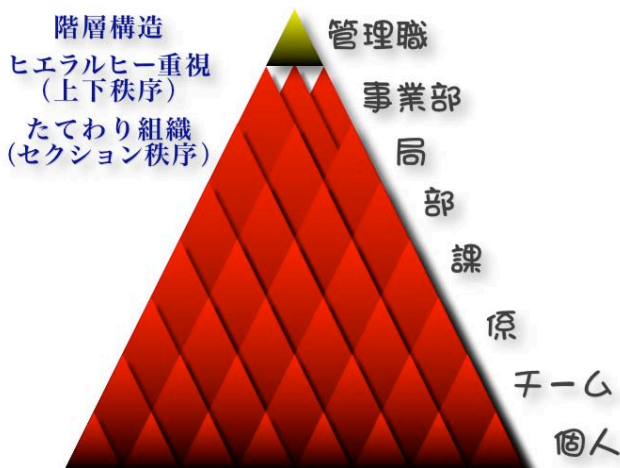
- 硬直化して上手く機能しなくなった今までの社会システムは早急に改変したい
- 従来のピラミッド・システムの特徴は、ヒエラルヒー構造+縦割り構造だ
- 新しいシステムは、プロジェクト主体の『タレント・プール・システム』である
- 情報共有を実現する『グループ・チャット・システム』：意味の薄い会議を減らす
- マイペース人生を可能にする『最低賃金システム』：個人の個性・能力・主義などをも尊重する

『近自然学』の提案する新しい社会システム（組織システム）が『タレント・プール・システム（人材バンク）』だ。特に技術系などプロジェクト単位で動ける領域では大変有効だ。これは組織内の人材（タレント）をひとまとめにし、個々のプロジェクトの目的にふさわしいタレントをその都度集めて効率的に利用しようというもの。フレキシブルなプロジェクト主体方式への転換であり、従来の硬直化しがちなピラミッド・システム（たてわり構造、階層構造）やセクション主体方式からの脱皮を意味する。個々のプロジェクトは、システム思考のできるユニバーサリスト（プロデューサー、プロジェクト・マネージャー）がリーダーとなってコーディネートする。リーダーはメンバーの上に君臨するのではなく、中心で調整役を演じることになる。そして、プロジェクトが終了すればプロジェクト・チームはリーダーもろとも解散する。

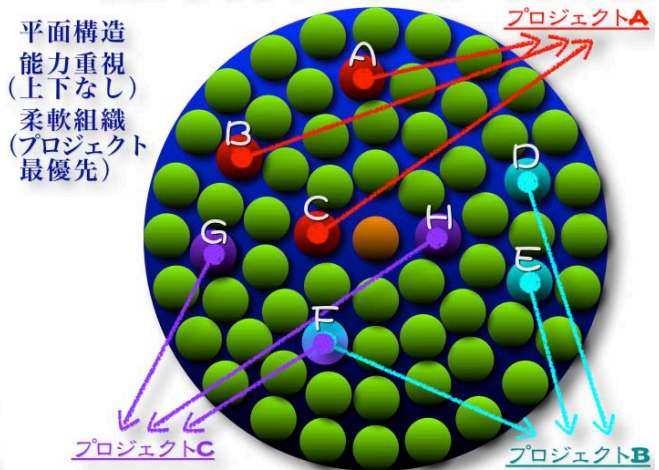
さらに給与システムも変わる。それが『最低賃金システム』だ。従来の、それぞれが決まった月給や年俸で働く（悪平等で不公平とも言われる）のではなく、皆が最低限の賃金が保証された上で、プロジェクトをこなすごとに賃金が上乘せされる新しいシステムだ。ゆったり生きたい場合でも最低賃金は得られるが、沢山のプロジェクトをこなせば所得が増える。能力のある者に正当な報酬を与えることでモチベーションが増し、組織や社会にとってのメリットも大きい。このシステムにより、個人の個性や能力や人生哲学などをも尊重した、マイペースな生き方ができることになるだろう。

『タレント・プール・システム（人材バンクシステム）』や『グループ・チャット・システム（電子掲示板）』はこれからの組織（企業や役所など）や究極的には社会全体にとってメリットの大きなシステムであり、将来は当たり前となるに違いない。ただし、人間どうしの直接のコンタクトが不要になるわけではなく、直接のスキンシップは会議ではなく、楽しい食事やお酒などに求めたい。

### 旧来のピラミッド・システム



### 新しいタレント・プール・システム



『タレント・プール・システム』は目的達成のために合理的であり、同時に個人の個性や能力、さらに人生哲学などをも尊重する

山脇正俊

2009年11月、スイス・チューリッヒ州・近自然学研究所にて■